
平成30年度 小学校教育課程説明会道德部会

奈良県教育委員会事務局
学校教育課 指導主事 丹下 博幸
MAIL tange-hiroyuki@office.pref.nara.lg.jp

道徳科の目標について

- (1) 道徳科の目標
- (2) 道徳性を養うために行う道徳科における学習
 - 道徳的諸価値について理解する
 - 自己を見つめる
 - 物事を多面的・多角的に考える
 - 自己の生き方についての考えを深める
- (3) 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

(1) 道徳科の目標

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

(小学校学習指導要領 P162)

道徳性を養うための学習の過程

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習

道徳科の目標について

(2) 道徳性を養うために行う道徳科における学習

○道徳的諸価値について理解する

児童が今後、様々な問題場面に出会った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うためには、道徳的価値の意義及びその大切さの理解が必要になる。

価値理解… 内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解すること

人間理解… 道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解すること

他者理解… 道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解すること

他教科等の「知識及び技能」とは異なり、知識として理解すること自体が目的ではなく、理解を深めて道徳性を養うことが目標であることを示している。価値の理解は、客観的、観念的に理解することではなく、自分のこととして考え、自分の生き方の手がかりとして理解を深めていくということ。

道徳科の目標について

○自己を見つめる

- 自己を見つめるとは、自分との関わり、つまりこれまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら、更に考えを深めることである。
- 道徳科の指導においては、児童が道徳的価値を基に自己を見つめることができるような学習を通して、道徳性を養うことの意義について、児童自らが考え、理解できるようにすることが大切である。

- 自分の問題として考えること。
- 自分であれば、どのような気持ちになるか、どのように考えるか、どのようにしようと思うかなど、当事者になったつもりで心の内を考えながら授業を受けること。
- 他人事として評論することではない。また、「自分ならどうするか」というように「行動」を問うことに終始するわけではないこと。

道徳科の目標について

○物事を多面的・多角的に考える

- よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切である。
- 児童が多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められる。
- 物事を多面的・多角的に考える学習を通して、児童一人一人は、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深め、更に自分で考えを深め、判断し、表現する力などを育む。
- 道徳科においては、児童が道徳的価値の理解を基に物事を多面的・多角的に考えることができるようにすることが大切である。

- ものの見方や考え方は人によって異なるものであり、道徳上のことは唯一絶対的な正解があるわけではないこと。
- 友達の意見をよく聞き、自分の考えを語ること。
- 授業者としては、児童の意見をよく聴き、対話のある（意見の交流がある）授業をすること。

道徳科の目標について

○自己の生き方についての考えを深める

- 児童が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。
- 道徳的価値の理解を自分との関わりで深めたり、自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方などを確かに想起したりすることができるようにするなど、特に自己の生き方についての考えを深めることを強く意識して指導することが重要である。

- 授業で新しく獲得した価値理解（広がったり、深まったりした）を基に、人間としてのよりよい自分の生き方について考えること。
- 価値の理解が新しくなる（価値の自覚をする）と同時に児童は自分のこれまでの生活を振り返り、授業後の感想にはそのことが自然と書き込まれることがある。

道徳科の目標について

(3) 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

道徳性

道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳の実践意欲と態度を養うことを求めている。これらの道徳性の諸様相は、それぞれが独立した特性ではなく、相互に深く関連しながら全体を構成しているものである。したがって、これらの諸様相が全体として密接な関連をもつように指導することが大切である。道徳科においては、これらの諸様相について調和を保ちながら、計画的、発展的に指導することが重要である。

道徳性を構成する諸様相

道徳的判断力

道徳的心情

道徳の実践意欲と態度

道徳性を構成する諸様相は、それぞれ独立したものではなく、相互に関連し合い、切り分けられるものではない。

内面的資質である道徳性の諸様相は、連携し合っており、道徳的行為を行うに当たっては、いずれも欠かせないものである。

道徳科においては、内面的資質である道徳性を養う。

道徳科の目標について

(3) 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

- 道徳性の諸様相には特に、序列や段階があるというわけではない。
- 一人一人の児童が道徳的価値を自覚し、自己の生き方についての考えを深め、日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味している。
- 道徳科においては、その目標を十分に理解して教員の一方的な押し付けや単なる生活経験の話合いなどに終始することのないように特に留意すること。
- 長期的展望と綿密な計画に基づいた丹念な指導がなされ、道徳的実践につなげていくことができるようにすることが求められる。

道徳科の内容について

- (1) 内容の捉え方
- (2) 視点及び各視点内の内容項目の順序の入れ替え
- (3) 内容項目を端的に表す言葉の付記
- (4) 発達の段階を踏まえた内容項目の構成の見直し

(1) 内容の捉え方

学習指導要領第3章の「第2 内容」は、教師と児童が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。

(小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 P22)

- 学習指導要領第3章の「第2 内容」で示されている各項目を「内容項目」という。
- 指導に当たっては、内容を端的に表す言葉そのものを教え込んだり、知的な理解にのみとどまる指導になったりすることがないように十分留意する必要がある。

道徳科の内容について

(2) 視点及び各視点内の内容項目の順序の入れ替え

視点の入れ替え（上:これまでの視点 下：今回の改訂による視点）

- 1 主として自分自身に関する事
- 2 主として他の人とのかかわりに関する事
- 3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関する事
- 4 主として集団や社会とのかかわりに関する事



- A 主として自分自身に関する事
- B 主として人との関わりに関する事
- C 主として集団や社会との関わりに関する事
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事

各視点における最初の内容

- A 「善悪の判断、自律、自由と責任」
- B 「親切、思いやり」
- C 「規則の尊重」
- D 「生命の尊さ」

道徳科の内容について

(3) 内容項目を端的に表す言葉の付記

- 道徳教育の内容項目を共有しやすいものとし、保護者や地域の方々との連携を深める。
- 内容項目を概観できるようにし、その全体像を把握しやすくする。
- 内容項目は、児童自らが道徳性を養うための手掛かりとなるもの。

内容項目＝ 教師と児童が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、実行に努めるための共通の課題

A 主として自分自身に関すること ← 内容項目の視点

1 善悪の判断、自律、自由と責任 ← 端的に表す言葉

〔第1学年及び第2学年〕

よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進ん

で行うこと ← 内容項目

道徳科の内容について

小学校の内容項目を端的に表す言葉

A 主として自分自身に関すること

- 善悪の判断、自律、自由と責任(低、中、高)
- 正直、誠実(低、中、高)
- 節度、節制(低、中、高)
- **個性の伸長**(低、中、高)
- 希望と勇気、努力と強い意志(低、中、高)
- 真理の探究(高)

B 主として人との関わりに関すること

- 親切、思いやり(低、中、高)
- 感謝(低、中、高)
- 礼儀(低、中、高)
- 友情、信頼(低、中、高)
- **相互理解、寛容**(中、高)

C 主として集団や社会との関わりに関すること

- 規則の尊重(低、中、高)
- **公正、公平、社会正義**(低、中、高)
- 勤労、公共の精神(低、中、高)
- 家族愛、家庭生活の充実(低、中、高)
- よりよい学校生活、集団生活の充実(低、中、高)
- 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度(低、中、高)
- **国際理解、国際親善**(低、中、高)

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

- 生命の尊さ(低、中、高)
- 自然愛護(低、中、高)
- 感動、畏敬の念(低、中、高)
- **よりよく生きる喜び**(高)

道徳科の内容について

(4) 発達の段階を踏まえた内容項目の構成の見直し

- ・ 小学校から中学校までのつながりを明らかにし内容の体系性を高め、児童生徒の発達の様子を踏まえ、ねらいをより明確にした指導を可能にするため。

(内容項目の例)

A 主として自分自身に関すること
4 個性の伸長

〔第1学年及び第2学年〕
自分の特徴に気付くこと。

〔第3学年及び第4学年〕
自分の特徴に気付き、長所を伸ばすこと。

〔第5学年及び第6学年〕
自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと。

(中学校) 向上心、個性の伸長
自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した
生き方を追求すること。

道徳科の指導について

- (1) 指導方法の工夫
- (2) 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

(1) 指導方法の工夫

- 「道徳的諸価値の理解」と「自己の生き方についての考え」とを相互に関連させながら深められるよう創意工夫し、多様な指導方法を取り入れ活用する。
- 道徳科における問題解決的な学習や道徳的な行為に関する体験的な学習等を取り入れたり、特別活動等の多様な実践活動や体験活動を生かしたりすることが考えられる。
- 児童同士で話し合う問題解決的な学習を行うに当たっては、そこで何らかの合意を形成することが目的ではなく、将来、道徳的な選択や判断が求められる問題に対峙したときに、自分にとっても他者にとってもよりよい選択や判断ができるような資質・能力を育てることにつなげることが大切である。

道徳科の指導について

(1) 指導方法の工夫

多様な教材を活用した創意工夫ある指導

- 道徳科は、主たる教材として教科用図書を使用しなければならない。
- 道徳教育の特性から、各地域に根ざした地域教材など、多様な教材を併せて活用することが重要となる。

- (2)教材については、教育基本法や学校教育法その他の法令に従い、次の観点に照らし適切と判断されるものであること。
- (ア)児童の発達の段階に即し、ねらいを達成するのにふさわしいものであること。
- (イ)人間尊重の精神にかなうものであって、悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題も含め、生徒が深く考えることができ、人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるものであること。
- (ウ)多様な見方や考え方のできる事柄を取り扱う場合には、特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないものであること。

(小学校学習指導要領 P168)

「学校における補助教材の適正な取扱いについて」(平成27年3月4日付け初等中等教育局長通知)など、関係する法規等の趣旨を十分に理解した上で、適切に使用することが重要である。

道徳科の指導について

(2) 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

各教科等における「見方・考え方」



各教科の特質に応じた「見方・考え方」は、それぞれの教科等の学びの「深まり」の鍵となるものである。

道徳科における「見方・考え方」

「様々な事象を、道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで（広い視野から）多面的・多角的に捉え、自己の（人間としての）生き方について考えること」

「主体的・対話的で深い学び」の実現

道徳教育においては、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」を実現することが、「主体的・対話的で深い学び」を実現することになると考えられる。

道徳科の指導について

(2)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「主体的な学び」の視点から

- 児童が問題意識をもち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考える学習とすることや、各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫する。
- 年度当初に自分の有様やよりよく生きるための課題を考え、課題や目標を捉える学習を行ったり、学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等に集積（ポートフォリオ）したりすることにより、学習状況を自ら把握し振り返ることができるようにすることなどが考えられる。

道徳科の指導について

(2)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「対話的な学び」の視点から

- 児童同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりする。
- 日頃から何でも言い合え、多様な意見を認め合える学級の雰囲気をつくることが重要である。
- 資料を通じて先人の考えに触れて道徳的価値の理解を深めたり、自己を見つめる学習につなげたりすることができるような教材の開発・活用を行うことや様々な専門家や保護者、地域住民等に道徳科の授業への参加を得ることなども効果的な方法である。

道徳科の指導について

(2)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「深い学び」の視点から

- 様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習とする。
- 道徳的な問題を自分事として捉え、議論し、探究する過程を重視し、道徳的価値に関わる自分の考え方、感じ方をより深めるための多様な指導方法を工夫する。

道徳科の指導について

(2) 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「深い学び」の視点から

深い学びにつながる指導方法の例

- 読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習
教材の登場人物の判断と心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めること。
- 様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決する学習
児童の考えの根拠を問う発問や、問題場面を自分に当てはめて考えてみることを促す発問などを通じて、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせること。
- 道徳的行為に関する体験的な学習
疑似体験的な活動（役割演技など）を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することで、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うこと。

道徳科の指導について

(2)道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

「深い学び」の視点から

- ・道徳的な問題場面には、
 - ㊦道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題、
 - ㊧道徳的諸価値についての理解が不十分又は誤解していることから生じる問題、
 - ㊨道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでできない自分との葛藤から生じる問題、
 - ㊩複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題

などがあり、これらの問題構造を踏まえた場面設定や学習活動の工夫を行うことも大切である。

道徳科の評価について

- (1) 道徳科の評価の基本的な考え方
- (2) 児童の学習状況を見取るための二つの視点の例
- (3) 道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点の例
- (4) 評価するに当たっての配慮

(1) 道徳科の評価の基本的な考え方

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

(小学校学習指導要領 P168)

道徳科の評価について

(1) 道徳科の評価の基本的な考え方

- 数値による評価ではなく、認め、励ます個人内評価として記述式で評価すること。
- 個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること。
- 他の児童との比較による評価ではなく、児童一人一人の成長に着目し、よい点や可能性、進歩の状況を積極的に受け止めて認め、励ますことが求められること。
- 学習活動により児童がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。

道徳科の評価について

(2) 児童の学習状況を見取るための二つの視点の例

① 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうかを見取る視点の例

- 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている。
- 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。
- 複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。 など

② 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうかに関する視点の例

- 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。
- 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している。
- 道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている。
- 道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている。 など

道徳科の評価について

(2) 児童の学習状況を見取るための二つの視点の例

道徳科の学習状況（**学びの姿**）の例

- 道徳的価値のよさや大切さについて考えようとしている。
- 道徳的価値について、1つの見方ではなく様々な角度から捉えて考えようとしている。
- 道徳的価値について、自分のこれまでの体験から感じたことを重ねて考えようとしている。
- 授業で学んだ道徳的価値のよさを感じ、これからの自分の生き方に生かそうとしている。 **など**

道徳科の評価について

(3) 道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点の例

- ア 学習指導過程は、道徳科の特質を生かし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、自己の生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか。
- イ 発問は、児童が多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。
- ウ 児童の発言を傾聴して受け止め、発問に対する生徒の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか。
- エ 自分自身との関わりで、物事を多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
- オ ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、児童の実態や発達段階にふさわしいものであったか。
- カ 特に配慮を要する児童に適切に対応していたか。

道徳科の評価について

(3) 道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点の例

道徳科の指導に生かす具体的な多面的・多角的な見方の例

- ねらいとする道徳的価値の様々な面を考える。
- 道徳的価値を支える様々な根拠を考える。
- 様々な登場人物の立場で考える。
- 焦点を絞って考えたり、視野を広げて考えたりする。
- 時間の経過とともに変化する気持ちを考える。
- 人間の強さや弱さなどを捉えて考える。 など

道徳科の指導に生かす自分自身との関わりの中で深めている例

- 教材の登場人物に自分を置き換えて考える。
- 教材の問題点等を自分事として受け止めて考える。
- 日常生活や学校生活等を想起しながら考える。
- 自分の生活を見つめ、振り返りながら考える。
- 自分だったらどうするかなど考える。 など

(4) 評価するに当たっての配慮

- 発言が苦手だったり、文章で書くことが苦手だったりする児童に対する配慮。
- 発達障害等のある児童や海外から帰国した児童、日本語習得に困難のある児童等に対する配慮
- 組織的、計画的な評価の推進 など